
意気地無し先輩との珍妙な日々

紺とすん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

意気地無し先輩との珍妙な日々

【Nコード】

N5988X

【作者名】

紺とすん

【あらすじ】

目の前で愛についてのゴタクを並べるこの人は、数週間前にわたしの長年の思いを木っ端微塵に粉碎した人だった。「はいはい、よく聞いとけ。愛というのはつまり、執着なのだ」「・・・先輩、黙ってください」今頃いったい、何しに来たのか。意気地無しで口だけ達者なワケありの先輩と大学生のわたしが過ごした、珍妙でたまに切ない日々。

(1) いきさつは一本釣り

「おまえ全然わかってないよ。あのね、だから愛っていうのは・・・

」

今日もまた、口だけ達者なこの人の愛に関する説教もしくはゴタクがむなしくひびく。

ここは何もどこかの講堂などではない。通っている大学の近くにわたしが借りた、古びたアパートの一室である。

こんな珍妙な事態をどうしろというのか。よりによって愛についてのゴタクを、なんでこの男からくどくど聞かされているんだろう、わたしは。神様おしえて。

目の前の男に最初に出会ったのは、この男が高校二年、わたしが同じ高校の一年のときだった。

一年生のとき、わたしはクラスを代表して文化祭の実行委員になった。別に積極的な性格だったというわけではない。クラスに希望者がいなくてくじ引きになり、四十分の一の確率のそれを引き当ててしまったのだ。

そう、昔からやつかいごとを引っ張ってくる素質があつたのだろう、と今にして思う。

文化祭実行委員は、会長をはじめとする生徒会役員や執行部の指示を仰ぎつつ活動する。当時、生徒会の副会長だったのがこの男なのだ。

ちなみに、生徒会役員は選挙で選ばれるが、生徒会執行部員は、自薦他薦に話し合いというあいまいな基準で選出され、人数もその年によって違う。というか、一般の生徒にとって、誰が執行部員を務めているかなんてことは、意識せずに済む話である。

その上、執行部員のほとんどが、生徒会役員によって文化祭実行委員の中から一本釣りされてくるなんてことは、ほとんどの人が知らないはずだ。わたしも知らなかった。

そしてわたしは、二年生のときは文化祭実行委員にはならずじんだ、かわりに、生徒会執行部に所属するはめになった。一本釣りされてしまったのである。

要は、文化祭実行委員と生徒会役員の接触が多い文化祭の準備期間中に、使い物になりそうな人間に役員が目星をつけるのだ。

この場合、使い物になりそうな人間というのは、何か指示を与えられるとそれをやらずにいられない、という人種で、カリスマ性やリーダーシップはもちろん不要だ。要領はいい方がいいのだろうが、要領がよければうまくまと釣られることもないわけだから、自然と要領の悪い人間が多くなる。事実、その学年の執行部員は女子はわたしだけだったが、男子は見事に全員、人のよさそうなタイプだった。

この男はわたしが二年、本人が三年のときも連続して副会長を務めた。三年になるときは会長に立候補するのではと思われていたが、会長に立候補して見事その座を射止めたのは、前年この男と同じく副会長を務めていた女子の先輩だった。

この人を仮に姫川先輩としておこう。姫川先輩は、凜とした雰囲気をもった美人だった。優秀な人でもあったが、やや人見知りのところもあり、あまり人の上に立つのは得意ではなさそうだった。

だから姫川先輩が生徒会長だった期間、実質的にその役割を担い、影に日向に会長を支えたのは、この男だった。

そういう性格の姫川先輩がなんだったってまた生徒会長に立候補なんてしたのかというと、先代の生徒会長の強力なプッシュ説が有力で、多分正解でもある。先代会長を仮に速水先輩としておく。速水先輩は姫川先輩のさらに一つ上の学年、つまりわたしが一年のときの三年生だった。

この姫川先輩と速水先輩というのが、後々語り継がれるような美

男美女、成績優秀カップルで、「お互いを高めあうおつきあい」をしているとかで、教師からも公認のお墨付きをもらうような間柄だった。速水先輩の卒業後も、もちろんその交際は続いていた。

速水先輩が姫川先輩を推したのは、その人見知りを克服させるため、というのが専らの噂だった。他に適役の立候補者もないとなれば、一般の生徒としても美人を会長にかかげるのはやぶさかではない。ということと、賛成圧倒的多数で彼女が会長に選出された。

凜とした美人で成績優秀、しかし実は人見知り。最強である。

速水先輩は、この男（もう面倒なので便宜上、北島先輩と呼ばせていただく）、北島先輩が会長職をうまくサポートするだろう、というところまで見切っていたはずだ。

北島先輩が姫川先輩に叶わぬ思いを寄せていたということまで、速水先輩が知っていたかどうかは定かでない。でも、案外知っていたのかもしれないと思う。

そう、北島先輩は姫川先輩が好きだとか、姫川先輩に振られた、とかいう噂が、ひそかにささやかれていた。当の北島先輩は、そんな噂を気にする様子もなく、副会長の仕事ぶりにも私情をはさむ様子は見られなかった。だから、それは根も葉もない噂だという人もいた。

でも、北島先輩が姫川先輩を好きだったというのは事実だとわたしは知っている。

だってわたしは見てたから。ずっと北島先輩を目で追ってたから。

だから、好きだという噂は本当でも、振られたという噂は嘘だということも知っている。もし実際に思いを伝えていれば、まず振られただろうと思うけど、それができるほどの度胸はない人だった、この男は。

昔からずっと、北島先輩は意気地無しで弱虫で卑怯だった。

そういうわたしも、高校時代には自分の思いを伝えることができ

なかった。

しかし、大学生になってから、わたしはきつちり北島先輩に思いをぶつけようとした。えらい。よくやった。自分を褒めたい。

ただしその長年の思いは玉砕した。それも先輩得意の逃げの戦法によって。

たくさん泣いて、体重も一か月ほどの間に5キロぐらい減った。そして、少しずつでも、ふっ切れるように頑張ろう、ダイエットばんざい、最近ようやくそう思えないこともないようになってきた。それがどうなんだ、今になってこの事態。

(2) 金魚のこと

そもそも、大都大学最難関の法学部の入試を突破した北島先輩を追いかけて、わたしは同じ大学に入学したのだった。法学部は成績的に無理だったし興味もなかったので、文学部で。

こんな男を追いかけて大学まで決めてしまうとは、なんて浅はかな若気の至りか。後悔しきり、ふんだりけったりだ。家計だって楽ではなかったのだから、地元の専門学校や短大、あるいは就職という道を探るべきだったし、実際この男に出会わなければ、そうなっていただろう。

執行部員時代のわたしは、よく働くコマとして、この男にわりと目を掛けられていた。

わたしが何のために、ムキになって執行部の仕事や、さかのぼって文化祭実行委員の仕事ごときをこなしていたかなんて、気付くような甲斐性はもちろん先輩にはない。あんなに尻尾を振って、従順な犬みたいに、いつもその姿を探していたわたしの気持ちなんて、先輩にとっては、道に落ちてるアイスの棒みたいなもの。

それでも、大学入学が決まったときに恐る恐る連絡をとってみると、昔のよしみで喜んでくれ、その後はときどき、食費にも事欠くわたしを食事にさそってくれるようになった。

あわよくば同じサークルに、と思っていたが、司法試験を受ける予定という先輩が入っていたのは法学研究会とかいうお堅いサークルで、わたしなんかは呼びびじゃなかった。

だからその場所が色気も何もなく、女子学生の姿すら珍しいような安っぽい定食屋や居酒屋ばかりであっても、いつだって食事が済むとハイ、サヨナラという素っ気なさであっても、おごってもらったばかりの気まずさがあっても、わたしは先輩に会えるその時間のた

めに、大学に籍を置いているようなものだった。

その食事にしたって、いつでも先輩と二人きりというわけではなく、先輩の友人の男子学生が何人か一緒のことも多かった。そうだろうが何だろうが、誘われればいつだって、ホイホイとついていった。

アジフライ定食なんかを食べながら、先輩は得意げに教授秘話やなんかをとつと披露する。二人だけのときは、高校時代の思い出話が出ることもある。でも不自然なほどに、姫川先輩や速水先輩の話題は避けられていた。

相変わらずよくしゃべる人だ、やはり弁護士なんかには向いてるのだろうか、でも実は気弱な性格が露見して、費用を踏み倒されたりするんじゃないだろうか、などなど思いつつ、だいたいにおいてわたしも呑気に話を聞いていた。

もうこのままの関係で十分幸せじゃないか、そう思い始めた頃。

先輩周辺に一人の女子学生の姿が見られるようになった。

それまで大学では、先輩のまわりに女の人の気配を感じもしなかった。だから気にしてなかったけど、考えてみれば、その意気地無しで弱虫で卑怯な本質がバレなければ、けっこうもてるはずの外見はしている。おまけに口だけは達者だ。

もしくはごく稀に、例えばわたしみたいに、意気地無しで弱虫で卑怯でもまあいいか、と思う人もいるかもしれない。

この女子学生の名を、仮に月影さんとしておこう。月影さんは、悪いことに、姫川先輩と雰囲気似ていた。姫川先輩よりだいぶ明るく積極的な感じはするが、立ち姿なんかがよく似ている。

北島先輩に話しかけるその姿を一目見たときから、わたしは今までの心地よい関係はもう終わるのだ、ということ悟った。

どの道、心地よいけどこんな嘘っぱい関係はいつか終わると、はつきりしていたはずだ。だからいつそ、月影さんに感謝してもいいしないけど。

月影さんは先輩と同じ法学部で、学年はわたしと同じ一年生だったが、それまでその存在を知らなかった。多分行動範囲があまり重ならないのだろう。もし見た事があれば、すぐ気付いたはずだ、先輩に会わせたくない人だと。

わたしは二人が親密になっていく様子を、ただ黙って見ていた。先輩からの食事の誘いは以前同様にあつたし、わたしも何食わぬ顔をしてついていった。その席で本人から月影さんの話題がでることはなかった。でも他の男子学生がからかう様子から、月影さんが熱心に働きかけてそろそろ王手をかける寸前、先輩がのりくらりと対応していることが見て取れた。

もう、はつきりしてくださいよ先輩。蛇の生殺しはやめてよ。自分のことを棚に上げ、わたしはまったく自分勝手に、先輩の相変わらずの煮え切らなさに苛立った。

さすがにもう無理だ・・・そう思ったのは、アパートの小さな水槽で腹を上にして浮いていた金魚に気がついたときだった。

この金魚は唯一、わたしが先輩からもらったものだった。あるとき二人で食事をした後、店を出たところで小学生らしき女の子に話しかけられた。どこぞで金魚すくいをしたらしく、金魚が一匹入ったビニール袋を持っていた。家では飼えないからお兄さんどうにかしてくれと、初対面のその子がいう。

それを先輩がにつこり笑って受け取り、その後で結局わたしに下賜されたというわけだ。そう、もらったというより、押しつけられたといった方が正しい。

でも、これあげるよ、大事に飼ってよと、先輩が言ったのだ。わたしがもらわないわけじゃないか。

それから慌てて金魚の飼い方やえさのやり方をネットで調べ、思った以上に弱い生き物であることを知り、それこそ大切に飼っていた。人には言えないが、夜には主に先輩に関する話題で、話しかけたりなんかしたりして。

その金魚を死なせてしまった。いつから餌をやっていなかったか覚えていない。昨日今日死んだのではないかもしれない。それにすぐ気付かないくらい、わたしは心がおろそかになっていた。北島先輩と月影さんの姿ばかりが頭に浮かんで。

大学には、数は多くないが信頼できる友人もいる。友人もその頃には、顔色が悪いと心配してくれていた。

友人の一人、ここでは仮に美奈と呼ばせてもらおう、美奈には、わたしが高校時代からずっと、先輩に思いを寄せていることも、先輩の豆腐の角みたいないな性格も、話してあった。だが、月影さんのことまでは話してなかった。

ただ、わたしが知らなかっただけで月影さんは学内にファンクラブがあるほど有名な人だったらしいので、わたしの落ち込みを見た美奈も状況を察していたかもしれない。

キタジマ先輩の奇矯な高校時代（閑話）

うむ。これはいい。やはり正面に座って見るのが一番だ。

いや、ほんとに。この子が必死な感じで書いては考え、書いては考えする様子は、猫が無心に前足を舐める様子にも似て、愛らしいな。

「おい、ちょっと待て。ここを見なおしてみろ」

このように親切に指導することによって、この子のオレに対する尊敬の念も、いやがうえにも増すに違いない。

後輩のこの子・・・仮にムラサキちゃんとしておこう、ムラサキは、生徒会副会長であるこのオレが、職権を正当に濫用し、文化祭実行委員の中から生徒会執行部に一本釣りしてきた子である。

職権濫用を更に進めれば、執行部員をオール女子で固めることもできなくはなかったが、現二年のムラサキの学年では、女子はこの子だけである。

執行部員は、文化祭前などは学校側に内緒で泊まり込み作業、なんてことになるため、正直言つて男子の方が扱いやすい。それに、美人生徒会長と噂の姫川が、女子にいじめられた経験でもあるのか、執行部に女子が多いのを嫌がったという事情もあったのだ、残念ながら。

いうまでもなく、オオカミの群れの中に羊を一匹放り込むようなヘマをするオレではない。ムラサキ以外の執行部員男子の人は、人畜無害なタイプであるかどうかを選定基準とした。これらのボンクラ男子諸君には、オレの卒業後も手下として、ムラサキの情報を流してもらう所存だ。

と、まあ、ここまでではよかったが。問題はこの子が若干、鈍いということである。

オレがこれだけアピールしているにも関わらず、この魅力のすべてが伝わっているかどうか、はなはだ心もとない。先代の生徒会長、速水先輩なんかは、「おまえは考え方がジジむさいし変態だ」などと失礼なことを言っていたが、こう見えて、体育祭なんかでは黄色い声援が飛んだりするのだ、ムラサキ以外の声帯からは。

もうちよつとこう、「せんぱあーい、ムラサキ、おべんと作って来たから食べてね？」みたいな展開にならないものか。

これまでのところ、いつだって先に話しかけるのはオレの方だ。

「先輩、聞いてますか。これでどうでしょうか」

「たたく、ボケるにはまだ早いんじゃないですか、というようなつぶやきが聞こえたのは気のせいだろう。」

「うむ、うまく修正できている。いいだろう」

そう言いつつ、ムラサキはほんのわずか、ふくれつらをしてジト目にならむようにオレを見た。

うむ。いい。この顔はいい。

これで今夜もばっちりだ。

さて。

次なる指導を熱心に行おうと身構えていたオレの情熱に気付かず、ムラサキは「これ会長に提出してきます」と、書類を手に立ちあがってしまった。

ムラサキは、生徒会長の姫川に何やら憧れをいだいているようである。まあ、姫川は美人だし成績も優秀だが、ムラサキとはまったく違うタイプだし、憧れてもしようがあるまい。

だからオレこそが、ムラサキにムラサキ本人が持つ魅力をわからせてやる必要があるのだ。

立ちあがったムラサキに、慌てて声をかけた。

「ムラサキは、猫みたいだね」

相当な勇気を動員してこのように褒めてやったところ、ゴミ箱のフタを見るような目で見られてしまった。

「わたしはどっちかっていうと、自分を犬だと思ってますけど」

しまった。犬派だったか。褒め方を間違えた。

そこへ当の姫川が、書類をかかえてやってきた。

「ちよつと北島君、防災面で揉めそうだから、一緒に来てくれる？」

「はいはい、ただいま参ります。じゃ、おまえ今日は、この辺であがつとけ」

ムラサキがタイミングを失って持ったままになっていた書類、それを手を出して受け取り、後ろ髪を引かれる思いを抱きつつ、姫川にしたがって歩きだした。

ムラサキがオレを、というか姫川を、目で追っているのがわかった。

こういうとき、この子はひどく心細いような顔をするのをオレは知っている。

もしムラサキが望むなら、ずっとムラサキの隣りにいて、ムラサキの魅力について、のべつ幕なしに教えてあげるのに。あんな心臓に悪い表情はさせないのに。

でも、望まれてないんだよなあ、オレ。ゴミ箱のフタだもんなあ、オレ。

先代の生徒会長、速水が卒業するまでは、ムラサキが目で追っていたのは、姫川でなく、むしろその彼氏である速水の方だった。まあ二人いっしょにいることが多かったから、両方を視界に入れてヤキモキしていたのだろうが。

速水・・・、あれはあんな顔して、悪魔のようなヤツだ。惚れて

はいかんと、何度注意しようと思ったことか。

あれは去年、まだムラサキが初々しい一年で文化祭実行委員、速水が三年で生徒会長、オレと姫川が二年で副会長を務めていた頃のことだ。

放課後、たまたまムラサキと鉢合わせしたので、その機会を的確にとらえ、副会長としての自分の凄さをアピールしてみた。このとき既に、ムラサキはかなり気になる存在になっていたのだが、ムラサキの方からは特に反応が返って来なかった。しかたなく、「気をつけて帰るたまえ」

と、さわやかな先輩ぶりを見せつけてから、リリースした。

ふと気がつくと、ハンカチが落ちていた。

うむ。ムラサキのものであるう。

いくら二次元がもてはやされる昨今であっても、もちろん、ここでこの匂いがかがなければ、高校生男子として変態である。

というわけでハンカチを拾い上げて堪能していた。ところを、速水に目撃された。

悪魔のような速水は、それを他言しない代わりに、自分の卒業後も含めて今後、姫川の虫よけとして完璧に機能すること、次期生徒会長として立候補するはずの姫川の仕事をサポートすること、この二点をオレに約束させたのである。

うむ。まあこれも、青春というヤツであろう。こうして幾多の苦い経験を積みながら、オレはますます素晴らしい人間に成長していくのである。

だから待っててね、ムラサキちゃん。

(3) 木っ端が微塵(前書き)

読んでくださった方、お気に入り登録してくださった方、ほんとにありがとうございます。

とても励まされます。

まだいろいろな機能をなかなか使いこなせていないので、失礼があったらすいません。

それから、アルファポリスに登録しました。

引き続きどうぞよろしく願います。。。

「閑話」の前、(2)からの続きです。

(3) 木っ端が微塵

ごめんねごめんねと泣きながら、死んだ金魚を夜の公園に埋め、わたしはいよいよ決心した。長年の思いを伝えて、決着をつけよう。

そこでわたしはない智恵をしぼって、先輩がごまかせない方法を考えた。間近にせまったわたしの誕生日、その日に会ってくれと先輩に頼んだのだ。

何の因果か、月影さんとわたしは誕生日が同じだった。それを知った時には、なんともいえない気持ちになった。なんでこの人と自分と同じ誕生日なのかと。

それでも、大学も同じ、好きになった人も(多分)同じ、ということは、運命だったのだろうか。立ち位置はだいぶ違うのに。だとしたら、なんだか嫌な運命だ。

断られたら、すっぱりあきらめて、新たに楽しい青春を謳歌しよう。わたしはそんな風に考えて、自分を励ました。そんなきれいごとであるわけないのに。

わたしは人を試すような、嫌な嫌な人間になってしまっていた。人のせいにしてごまかすような、嫌な嫌な女になってしまっていた。きつとわたしは先輩にふさわしくないのだろう。

でも、先輩のことを知るまでは、こんなに嫌な人間ではなかった。だからこれはずいぶん、先輩のせいということにする。

あるいは先輩の胡散臭い説教のことばを借りれば、愛のせいともいう。

そして案の定、前日になって、先輩はその日会うことを断ってきた。電話一本で。それも、月影さんのことを暗示することさえなく、

急きよ実家に帰省しなければならなくなったという、腹の立つ理由をつけて。

逃げられた。体中の血液がざつと音をたてて落ちていくような感覚の中で、わたしはそう思った。

それから一週間ほどたって、実家云々の話はまあ嘘ではなかったことがわかった。あの日、先輩の父親が手術を受けることになったそうで、父親のその後の病状は安定して回復に向かっているものの、一時期は危なかったという。

その情報とともに、それまでのように二人で食事することも、もうできなくなったことがはっきりしてしまった。わたしは選ばれなかった。

そのうえ、それ以前のひと月ほどは、父親の体調が思わしくないため、大学を休学するか、最悪やめて、家業を手伝うべきかと悩んでいたらしいことも耳に入った。

そんなこと一言も聞いていなかったわたしは、木っ端微塵に吹き飛ばされた。

先輩の実家は、わたしの実家から車で三十分足らずのところにあるはずだ。高校時代の話をするついでにでも、どうして話してくれなかったのか。そんな事情を抱えて、なんでいつも、あんなに楽しそうにしていたのか。そんなにもわたしは、信用されていなかったのか。あんなに優しく笑っていたのに、どうしてこんな、残酷な仕打ちができるのか。

それが今から、ほぼ三週間まえのことだった。何かを食べる気にもならず、外出する気にもならず、ぐっすり眠ることもできず、美

奈をして「どどめ色の生活」と言わしめたそんな生活からなんとか少し浮上して、お腹がすいたり、眠くなったりするようになってきた今日この頃。

世間一般は夏休み。

わたしも以前から決めてあったバイトにせいを出し、お金稼ぎに没頭しつつある今日この頃。

くどいようだが、先輩の「せ」の字も口に出さずに、わたしが地の底からなんとか這いずりあがろうとしている今日この頃。

あの男が、先輩が、やってきたのだった。愛に関するゴタクを並べるために。

その日は朝から雨だった。そんな筈はないのだけれど、あのどどめ色の日々には毎日雨が降っていたような気がするから、それ以来、雨は大嫌いだ。

夏休み中の平日は、すでに決まっているファーストフードのバイト。基本は昼過ぎから休憩をはさんで午後七時か八時まで、ほぼ毎日。週末は週末で、単発で割のいいバイトを入れるつもりだった。とにかく忙しくしていたかった。

平日だったのでファーストフード店での接客中、珍しい客があった。

同じ学年、同じ学部の男子学生と、美奈。取っている講義がけっこう重なっているようで、その男子学生には何度か話しかけられたことがあったのだが、あいにく名前を覚えていなかった。そこで再び名前を教えてもらった。ここでは仮に小野寺君としておこう。

心配性な美奈のこと、何かのついでにバイトの様子を見に来てくれたのだらうと、そのときは思った。

バイトをあがってさて帰ろうか、と携帯を確認すると、美奈から

「ユー、もお先輩のことなんか忘れちゃいな」という某事務所社長みたいなメールが入っていて、店を出たら雨の中、小野寺君が待っていた。そういえばバイトが終わる時間を聞かれた気がする。

小野寺君いわく、わたしが小野寺君の顔を覚えていない可能性が高いので、わたしと親しい美奈に聞いてバイトのことを知り、一緒に来てもらったのだという。

そんな話を聞くと、わたしに特別な関心があるのかと思ってしまいそうだが、だまされてはいけない。何せわたしは、ある程度は親しいと思っていた人に、大学をやめるかもしれないという一大事を伏せられていた過去を持つ女だ。

おおかた美奈が、おせっかい心を起こして、小野寺君に頼みこんでくれたのだろう。

小野寺君は、まあいわゆる、ナイスなガイだ。はやりの服装に髪型、さわやかな語り口、大学で話しかけられたり姿を見たりした時も、同じような感じの女子学生に囲まれていた印象がある。

もしも世の中の人間を、月影さんタイプとわたしタイプの二つに分けるとすれば、いうまでもなく、月影さん側に属する人である。今までいろいろ心配してくれた、美奈の気遣いは心にしみて、素直にうれしい。でも正直、まだ今はこの種の気遣いはいらないし、忙しくも楽しい予定が満載な感じの小野寺君にも申し訳ない。

結局その日、小野寺君はわたしの古いアパートの近くまで雑談をしながら送ってくれて、そのままスタスタ帰っていった。

「おい、おまえ」

小野寺君の背中を見送ってから、玄関の鍵をあけたところで、忘れもしない人の声がして、それはもう、腰が抜けるほどびっくりし

た。

(4) そして先輩がやってきた

「おい、おまえ」

小野寺君の背中を見送ってから、玄関の鍵をあけたところで、忘れもしない人の声がして、それはもう、腰が抜けるほどびっくりした。

「先輩！」

咄嗟につかまえようとして腕を伸ばし、でもあっさりと避けられて、わたしの腕は空をきった。

「おい、おまえ。今まで、どっかの男に送ってもらってたんだろう」「会っていきなりそれですか。先輩には一切、関係ないですよ？」「まあ、そうといえはそうかもしれない。だがしかし、おまえ世間知らずだし、いろいろ忠告してあげよう」

「先輩、自分は世間知らずじゃないと思ってたんですか」

「まあ聞け。この世の男はすべからく全員、下劣な生き物だ」

おまえもな。

「家まで送るの、何か買ってやるの、飯をおごるのといったって、考えることはただ一つだ」

「いっそ先輩がそうだったら、どれだけわたしは救われたことか。」

「だいたいおまえは何だよ、ふらふらふらして、もつとしっかり毎日を生きる」

「そのことは、そっくりそのままお返しします。結局何が言いたいんですか」

「いや結局ってそんな・・・つまり」

「つまり、何なんですか」

「つまり、愛というのは、執着なんだよ」

「・・・黙ってください」

わたしは思わず、手に持っていた鍵を投げつけた。

そしてその日から先輩は、この古いアパートにしばらくの間、いつくことになる。

次の日。天気は晴れ。

バイトが終わってアパートにたどりつくと、わたしは自分に言い聞かせた。

さすがにもう、先輩はいないだろう。いなくて当然なんだから、いなくてもがっかりする必要なんてない。だいたい昨日だって、言いたいことだけ言って後は知らんぷり、一体あの人はなんなのだ。玄関の鍵をあけて中に入ると、先輩はその日も、いた。

「おまえ遅いぞ。いったいどれだけバイトすれば気が済むんだ」

「だから一切、先輩には関係ないことですよね」

「学生の本分は勉強。そう誰かが教えてくれなかったのか」

「わたし、お金がないんです。知ってますよね、成績的にも家計的にも、無理してこの大学入ったこと」

「や、それはそうかもしれないけど・・・」

「で、先輩いったい何しに来たんですか」

「だからそれは、世間知らずなおまえに、男や愛と言うものの実体を教えてあげようかと。ついでに学生の本分についての講義も追加しよう」

次の日も、その次の日も。夜バイトから帰ってきて、恐る恐るドアを開けると、先輩がいた。おかえり、なんて言ってくれるようになった。

あのだめ色の日々はなんだったのか。

しかしだからといって、関係が進展するようなことは一切まったくなかった。あくまで先輩と後輩。説教する人と、される人。まあ後者の関係は逆転することもままあるが。

部屋にまで押しかけてくるくせに、手も握れないのだ、この人はそれでも、出ていけと言えるかというところ、言えない。でもずっとこのままでいられるわけがない。さすがにこのことは、美奈にも相談できなかった。

「はいはい、よく聞け。つまり好きだ、惚れたと言ったって、そんなの何の意味もない」

言ってみてから、ほざきなさい。

「愛は惜しみなく奪う、と有島武郎もいつている」

「愛は惜しみなく与う、というトルストイのことばがあつての有島です」

文学部なめんな。成績は多分ギリギリだけど。

「いいから聞いとけ。愛は目に見えないから皆、幻想を抱く。しかし結局、愛とは醜いものなんだ」

「愛は行動を伴うもの、というのもありますよね。マザー・テレサですけど。先輩は行動したこと、ありますか？ ありませんよね。

わたし、勘違いしてますか？ してませんよね。何か言うこと、ありますか」

「・・・ない」

これは先輩の「愛とは攻撃」に備え、バイトの前に調べておいたもの。

どどめ色の日々より以前は、とうとうとしゃべる先輩のことばをただ聞いていることも多かったのに、反論ばかりがうまくなくて、どんどん可愛くない女になっていく。

責任とってくださいよ、ほんとに。

(5) 聞きたくない(前書き)

今回ちょっと暗いと思います、すいませんです。。。
読んでいただいて、ありがとうございます！

(5) 聞きたくない

その日もまた、雨だった。珍しくバイトが入っていない日で、小野寺君から、映画でも見に行こうと誘われていた。

迷った末に、わたしは誘いを受けることにした。先輩と話せるのは嬉しい。でも、今のままじゃだめだ。先輩を見返してやりたいような気持ちもある。

小野寺君の誘いにだって深い意味はないんだ、こちらも気軽に受ければいい。

ほとんどやけくそみたいな感じで待ち合わせ場所に行ったわたしを見て、小野寺君は「かわいいね」と言ってくれた。

わたしが一番言っただけだと思ってる人からは、もちろんこんなこと、一度だって言われたことはない。自分が欲しかったのは、こんなに短くて簡単なことばだったのかと、思わず感心してしまった。

映画は、楽しかった。映画の後の食事も、ただ何となくそのへんを歩いただけの散歩も。

普通の会話って、こんなだった。このところ理屈っぽい話ばかりしていたから、なんだか新鮮だった。

小野寺君は、軽い、というか、人当たりが良すぎる、というか、元々そんな印象があつて、それも大きく外れてはいないだろうけど、とても気遣いのできる人だった。

こちら話をよく聞いてくれて、逆に話題が途切れると、何か楽しい話をふってくれる。黙っていたいと思う時には、それを察して黙っていてくれる。つい、異常に空気の読めない誰かと較べてしまふことを割り引いても、この外見でこの人柄なら、人気があるはずだ。

そして帰り際、つきあって欲しいと言われた。

ホットサンドはさめるとまずい、そんな事実を口にするのと同じような棒読み口調に聞こえたけれど、それでも単刀直入ってすばらしい。

わたしもそれを見習って、返事はできるだけ単刀直入をめざしてみた。

つまり、自分はつきあう気はないけど、今日は楽しかったし、誘ってくれて嬉しかった、とこんな感じで。楽しかったのも、嬉しかったのも、社交辞令ではなく本心だった。

小野寺君の方は、わたしがそう答えることを予想していたようだった。美奈から先輩のことを何か聞いていたのかもしれない。もつと言え、やっぱり美奈から何か頼まれたんじゃないかと思う。でも、そこまで確認してダメージを受けるだけの気力がなかった。

わたしの返事に対して小野寺君は、自分は女の子の友達が多いし、最初はそういう友達と同じように、特別意識しなくていいから、というようなことを言った。

冷静に考えてみれば、その発言も微妙だ。一夫多妻的な感じ？でも、棒読み口調だろうが何だろうが、告白じみた話を聞かされるってことは、わたしにとってかなりの異常な事態だ。だから多少はパニックっていたので、じゃあ今までと同じようにしていればいいのかと、よくまわらない頭で納得したのだった。

その日の帰宅は、夜九時ごろになった。玄関のドアを開けると、やっぱり先輩はいた。

そして妙に絡まれた。

「食物を愛するよりも誠実な愛は存在しないと、バーナード・シヨ

「も言っている」

「まあ、食事は大切ですよ」

わたしの返答は、いつもより上の空になりがちだった、あることはを聞くまでは。

「まったくおまえは、浮気者だな。同情されたのを愛と勘違いするんじゃないよ」

「！」

それは小野寺君のことを言っているのか。わたしにはもう、同情されたからって怒るようなプライドはない。でも、今のことはをよりによって、先輩がわたしに向かって言うのは絶対許せない。

手近にあったハサミをとりあげて、先輩めがけて投げつけた。ハサミは先輩にはあたらず、壁に当たって跳ね返った。それをもう一度投げつけようと拾ったとき、ハサミの片方の刃の部分を握ってしまい、手のひらに赤い血がにじんだ。

それを見て自分がしたことの意味さによろしく気が付いて、この人の前では絶対に泣くまいと思っていたのに、声をあげて泣きだしてしまった。

「ごめん、ごめんね」

わたしが泣き疲れてそのまま寝入るまで、先輩が謝る小さな声が、子守唄のように聞こえていた。

次の日。バイトにも身が入らず、注文を何度も間違ってバックヤードに配置換えされたりして、どっぷり疲れてアパートに帰ってきた。さすがにもう先輩はいないだろう。いないはずだ。いないに違いない。いない方に一万円。

「おかえり」

ドアを開けると、何もなかったかのような、先輩の声。

わたしは心底ほっとした。それなのに、口から出たのは心とは裏腹なことばだった。

「先輩、いい加減もうどっか行ってください。人の恋路を邪魔する気ですか」

「・・・ごめん。愛というのは」

「聞きたくありません」

「聞いてくれ。愛というのは執着だ。だからまだ、いなくなれない」

「先輩は、何に執着してるっていうんですか」

「・・・あの金魚は、いないんだね」

わたしの質問に答えるかわりにそう言った先輩は、寂しそうだった。

「人の恋路を邪魔したいとは思わない。応援したいとさえ思ってるよ」

先輩の無意味なことばを、今度はわたしが無視した。

(6) コーヒーカップが飛ぶほどの愛？

それからしばらくして、また小野寺君が誘ってくれて、今度は迷わずに誘いを受けた。新しくできたお店で夕食をとり、わたしが頑固に言い張って割り勘にしてもらった。

食事はちゃんとおいしくて、つまり食べ物の味もわかったし、おしゃべりも楽しかった。

帰りはまたアパートの手前まで送ってくれたから、そこで別れた。アパートへの帰り道、月を見上げて歩きながら、小野寺君とはじめて手をつないだ。

先輩は、その日も、いた。でもいつもより、無口だった。というか、ほとんどしゃべらなかった。いったい何がしたいんですか。

いらいらするような気持ちで先輩を軽く睨むと、少し恨めしげな目を向けられた。

わたしは衝動的に、先輩にくるりと背を向けた。そしてその場で、服を脱ぎはじめた。何もまとわない姿になるまで、すべて。

それから振り向かず部屋を出て、シャワーを浴びにユニットバスに向かった。

部屋を出るまでずっと、背中に視線を感じていた。でも先輩は、ひとこともことばを口にしなかった。

そのあと一人で布団に入ると、あんなバカみたいなことしたってどうにもならないのに、と後悔で泣けてきた。先輩だって呆れて泣いてしまったかもしれない。

その日は、子守唄も聞こえなかった。

やっぱり今の状態はよくない。先輩のためにも、わたしのために

も。

先輩が悩んだ揚げ句に大学をやめる選択をしていたなら、わたしも大学をやめて地元についていてもよかった。いやもちろん、そんなことをしても何の意味もないし、役にも立たないだろうけど、先輩に対してそれくらいの気持ちは持っていたということだ。

今だって、先輩が望むなら、わたしにはついていく覚悟がある。でも、先輩にはそんな覚悟はない。これからもずっと、そんな覚悟はできないに違いない。

考えた挙句、ある日私は、夕食を外で一緒にとった後に小野寺君をアパートに誘った。

玄関のドアを開けるときは緊張した。先輩の気配は感じたが、姿は見えなかった。

わたしの緊張を、初めてアパートに誘ったことが原因と思ったらしく、小野寺君はいつもより優しくかった。実際、思っていた以上に優しい人だった。

わたしは自分が小野寺君を利用しているのか、それとも彼とそういう関係、つまり「青春を謳歌」するような関係になりたいのか、自分でもよく分かっていなかった。小野寺君は別にわたしに夢中というわけではない、それはわかっていたから、都合の悪い感情には目をつぶっていた。

ドリップのコーヒーを入れ、二人で一緒に飲んだ。ソファなんてものはないから、低いテーブルを前にして、床に敷いたラグに直接、並んで座っていた。

小野寺君の右手が、わたしの肩にそつと置かれた。意外にも少し息をつめたような表情で、こちらを見ている彼と目があつた。まつ毛が細くて長いんだな、なんて思っているうちに、静かに抱き寄せられた。

目を閉じたわたしの唇に、さらりとした感触が落とされた。

そのときだった。いきなり金属をガンガンたたくような音が鳴り、床が揺れ、コーヒークップがテーブルから落ちた。

二人で慌てて外に出た。手はしっかりつないで。

「地震かと思ったら、違うみたいだね」

「うん。今はもう、揺れてないね」

「まるで、あれだよ、ポルターガイストってこんな感じかもね。計ったようなタイミングで、誰かがやきもちやいたみたい」

「ははは、そういえば近所で水道工事してるとかで、このアパートの下を水道管が通っているから、変な音がしたり揺れたりするかもしれないって。回覧板がまわってきてた」

「ふうん」

回覧板なんて大学入学以来、見たこともないけど、適当なことをいってごまかした。

しかし侮れないな、小野寺君。やきもちの部分以外は正解だよ、多分。

キタジマ先輩の奇矯な大学時代（閑話）

うむ。なかなか。いい眺めである。

この子がちびた湯のみを両手で持つて番茶をすすする姿は、リスが手のひらの匂いを嗅いでるみたいで、愛くるしいな。

だがしかし。オレはこの子を「リスみたいだね」と褒めないだけの賢さを身につけている。

なぜそう褒めてはいけないか。なぜなら、この子がリス派とは限らないからである。

この子、高校でも大学でも一年後輩となつたムラサキちゃんとの長年の付き合いを熟成させる中で、オレもいろいろなことを学んできた。その集大成を、そろそろ見せつける時期に来ているのかもしれない。

ムラサキが高校一年、自分が高校二年のときに、二人は運命的な出会いを果たした。そしてオレが大学に入学した後は、折に触れ、高校時代に手厚く面倒を見てあげたボンクラ後輩たちからムラサキに関する情報提供を受けてきた。だから、わき目もふらずに受験勉強に打ち込んでいる様子から受験予定の大学まで、当然ながら把握していた。

その結果なんとムラサキは、オレの在籍する大都大学に入学することになったのである。

これぞ運命というものではないか。

そうと決まれば、なんとかして、さりげなく、偶然に、ムラサキに連絡をとらねばならない。もちろんケータイのアドレスも入手済みだが、さすがに瓶に入れて海に流した手紙みたいに、偶然メールしたら届きました、というわけにもいかない。

どうしたものかと思っているうちに、オレの連絡先を手下、いや後輩から聞いたというムラサキの方から電話が来た。

いままでムラサキから電話をもらったことがあっただろうか、否、ない。

これはもう、何かのはずみにオレの魅力に気付いてしまったとは思えない。この機を慎重にとらえなくては。

電話では、大学生活における金銭面のことを気にしていたから、最低でも週一回、いや二回以上はゴハンを食べさせてあげることしよう。

保護者達の受けが異常によいオレは、高額のカテキョバイトを複数確保していたし、ぜいたくをしたいとは思わなかったから、さほど金には困らない生活をしていた。

よって、多少無理すれば高めの店に行けないこともない。が、ムラサキは遠慮がちなタイプだ。

さらに、オレが下心とは無縁の存在であることをアピールするためにも、いつも通っている色気のない定食屋が最適だろう。

しかも、こういう店ならサークル仲間も通ってくるから、彼女ができたと思って羨ましがるはずだ。一石二鳥である。

と、いうわけで、今日もリスさんといっしょに定食屋でゴハンを食べたところだ。

店を出ると、いたいけな女の子が、金魚が一匹だけ入ったビニール袋を持って途方に暮れていた。

子どもにとって、オレはずいぶん頼もしく見えたのだろう、金魚の面倒を見てやってもらえないかとお願いされた。もちろんオレは、期待に沿うべく金魚を受け取った。

金魚の入ったビニール袋をムラサキの顔の前にかかげてみせると、口を半開きにして見入っている。

ちろちろと泳ぐ赤い金魚を追って動く瞳は、濡れた黒猫みたいな

色だった。白眼の部分は透きとおるくらいで、うす青くみえる。太陽が当たっている部分の髪が、柔らかく光っていた。

ああ、きれいだな。
と思った。

だがしかし、である。これを口に出して言ったら、トイレットペーパーの芯を見るような目で見られてしまうことだろう。それをやられると、しばらく立ち直れない。

うむ。この金魚はムラサキにあげることにしよう。

いつの日か、この子はこう言うであろう、

「せんぱい、わたしのキンギョを見に来て」と。

そしてオレはこう答えるのだ、

「よしよし、ムラサキのああいふキンギョさんもこっぴつキンギョさんも見てあげるよ」

さて。

何も口に出していないのに、今現在、トイレットペーパーの芯を見るような目でにらまれているのは、気のせいだろうか。頭はさほどは良くないが、勘は妙に鋭いヤツ、というカテゴリーに分類されるのかもしれない、ムラサキは。

くれぐれも慎重にいかねばなるまい。

雑念を振り払ってからムラサキに金魚をあげると、一瞬だけ、とても嬉しそうな顔をした。

この子もう連れて帰ってしまうか、と思うぐらいの衝撃度ではあったが、オレの理性は紙の六法全書のように厚い。

まあとにかく、よかった。彼女は金魚派だったようだ。

清く正しくムラサキに手を振って、去っていく姿を見送った。

振り返ると、あの月影さんが歩いてくるのに気がついた。月影さんは、男子学生の間でのみ受け継がれる、学部内女子ランキングのかなり上位に位置する一年生である。

小さくなっていくムラサキの背中を、月影さんもじっと見ている。よくわからないが、さすが女王の迫力、ちょっと怖いぞ。

「北島さん、お食事？」

「やあ、マツコ。そうなんだ、お食事だったのだ、元気そうで何よりだ。じゃ、少し急ぐので、悪魔のような男に騙されないように注意しろよ」

そう言って退散の体制に入ったところ、オレの素敵な顔をじっとり見てから歩み去った。

そういえばサークル仲間が、来たるべき月影さんの誕生日のため、対策委員会を開くと言っていた。誕生日対策委員として誘われたが、美人は歳をとるのを嫌がるから、余計なことはしない方がいいよと親切に教えてあげた上で断った。

残念ながら、月影さんは高校時代の同級生である姫川に似ている。ある事情から、姫川の彼氏である悪魔のような男、速水に脅されていたため、姫川に似た月影さんを見ると反射的に挙動不審になってしまう。

なお、月影さんもオレの魅力に気付いた一人らしく、最近になって、いろいろな働きかけをされるようになった。

月影さんの積極性はムラサキも見習えばいいと思う。が、何とか早いうちに、円満にオレを姫川似の月影さんの視野から放逐してもらいたいというのが正直なところだ。

サークル仲間から聞いた話では、月影さんは自分のファーストネームである「マツコ」を忌み嫌っているという。たしかにイメージとは多少違うが、デラックスな感じでいいと思うのだが。

いずれにしろ、「マツコ」と呼ぶと嫌われると聞き及んで以来、彼女のことをそう呼んでいる。しかし、今のところ効果は見えない。逆効果の感すらある。

悩ましいところだ。

悩みと言えば、もう一つあった。実家の父親の体調が思わしくないという。心配をかけまいとしているのか、電話口では深刻ではないというばかりで、はっきりした病状はわからない。家業が父親の肩にかかっている状態であつたから、できのよい息子としては、休学してでも力になるべきだろうか。

休学しても、たとえば司法試験の勉強はできるだろうが、決断は容易ではない。

ムラサキとの距離も縮まってきたところだ。休学するにしたって、最低週に一度ぐらいは、さりげなく偶然にムラサキに会えるような方策を立ててからでないと、とても彼女には話せない。

うむ。早急に方策を考えねばなるまい。

それからしばらくたつたある日のこと。

なんと。ムラサキの方から、会って欲しいとお願いされてしまった。今までかつて、こんなお願いをされたことがあつただろうか、否、ない。

しかも指定された日は、ムラサキの誕生日だった。ただし、話の感じでは、本人はそれを忘れている可能性が高い。

それでも誕生日プレゼントを渡すべきか。そんなことをしたら、下心ありと誤解されてしまうか。

それともいつそ、下心です、といって渡すか。

そんなこんなで悩んでいたところ、もう一つの苦難に襲われた。父親の手術が決まったと実家から連絡があつたのだが、それがムラ

サキの指定した日と重なってしまったのだ。

実家からの連絡に対して、休学の心づもりを申し出ると、そんな役にも立たないことを先走って考えられても逆に迷惑だとすら言われてしまった。

そう言ってくれる親の心遣いには感謝だが、一度自分の目で状況を確認する必要があるだろう。幸い、手術自体は大きな危険を伴うものではないらしいが、帰省のついでに、いろいろとスッキリさせてから戻ってこよう。

そういえば、兄をさしおいて彼氏ができてしまったらしい、薄情な妹にもしばらく会っていない。今はさすがに心細い思いをしているだろうから、彼氏よりも頼りになるところをついでに見せてあげよう。

だから、その日に会うのは断腸の思いであきらめる。でも戻ってきたら、今度こそムラサキのこともハッキリさせて、新たな展開に踏み出そうと思う。

だから待っててね、ムラサキちゃん。

しかし、この後で人生最大の苦難に襲われることまでは、さすがのオレでも予想できていなかった。

ごめん、ごめんね。

(7) 言われなくても知ってます

心配する小野寺君を説得して帰ってもらって、わたしは部屋に戻った。

「どこにいるんですか、先輩。出てきてください」

先輩がスツと現れた。

「何でこんなに意気地無しで弱虫で卑怯なんですか」

何も答えない。

「先輩といっしょに行ったっていいんです。きっと覚悟はできてます」

「それはできない。わかるだろ？」

「何ですか。なんだったら今から高いビルの屋上に一緒に行きますか。あ、でも先輩、ここから出られないんですよ。じゃあ今、ロープを用意してきますから。鴨居はないから、どこで吊ればいいですかね。朝になって先輩が消える前に決着つけますよ」

「だめだよ。そんなの全然だめだ」

「わたし、先輩に言われなくたって、愛は醜いって知ってます。わたしにはお似合いです」

「お願いだ、そんなこと言わないでくれ」

「なんでわたしも逝っちゃだめなんですか。バカなわたしに分かるように説明してください、今ここで」

「ごめん、今までオレが言ったことは全部うそ。愛は醜くないし、奪うものでもないし、食物の方が大切でもない」

「執着っていうのはどうなんですか。先輩が執着してるのは何ですか？」

「それ、本当にわからないで聞いているの？」

「こんなにあからさまに出られればわかります！　そこまでバカじゃありません。先輩の口から聞きたいんです」

「オレが執着してるのは、おまえだよ」

「声が小さい」

「おまえに執着しています」

「もう一回」

「おまえを愛してました」

「何で過去形なんですか。何でもつと前に言ってくれなかったんですか。バカですか。バカなんですネ」

「バカです。バカがつくほどずっと前から好きでした」

「だから過去形は認めません！先輩、手を握ってよ。抱きしめてよ。キスしてよ。さっき先輩じゃない人としちゃったじゃないっ」

「おまえ、あんなのわざとオレに見せん。あんなの見て喜ぶタイプの変態じゃないんだよ、オレは」

「わたしだって恥ずかしいよ！先輩のぶあーか、ぶあか、ばかもの、もうどうしたらいいか、わかんない」

「もうバカって言うな、そっちこそバカな頭で姑息なこと考えやがって」

「でも先輩バカでしょ。前からうつすら思っていたけど、あっさり死んじゃうほどバカだとは思わなかった」

「だからあっさり成仏しないで出てきたんじゃないか、おまえのところに」

「何でそんなにえらそうなんですか。来るのが遅いつて言ってるんですっ」

「いいか、よく聞け。愛とは執着に似ているのだ。こういう身の上になってよく分かった。だからつい、愛した人のところに出てしまふ。成仏できないってのはつまり、執着してるってことに等しくもあるのだ」

「何がついですか、何を得意げに解説してるんですか」

手近にあったグラスを先輩に向かって投げつけた。

グラスは先輩の体をすりぬけて、壁に当たって砕けた。

「こうなってから気がつくってこともあるんだよ。おまえは世間知らずだから教えてあげる。行動は生きてるうちに起こせ」
「あんたに言われたくないっ」

もうわたしの顔は、涙と鼻水でぐちゃぐちゃだった。

先輩はあの日、実家に帰る途中で事故にあって亡くなった。わたしがそれを知ったのは、亡くなってから一週間もたってからだった。どどめ色の日々の幕開けだ。

わたしと月影さんの誕生日は命日になった。どこまでわたしをばかにしたら気が済むのか。

(8) 涙と鼻水と虹と

でも、わたしはどんな形であれ、また先輩に会うことができ、嬉しかったんだ。

「先輩・・・ありがとう」

「なんだよいきなり、気味が悪い」

「気味が悪いのはこっちです!」

「とにかく、この経験を糧にして、おまえも前に進んでけ。なんだかオレもすつきりしてきた」

「ダメです先輩、姿がうすくなってきました。やだ、いなくならないでよ」

「いや、いい気分になってきた。今のセリフ、後半だけもう一度、繰り返してもらおうか。ま、いなくなるけど」

「先輩!」

「一生のお願いだ。わがままばかり言って悪いが、気持ちよく送り出してくれ」

「やだ。一生のお願いってギャグですか」

外で激しく、雨が降りだす音が聞こえてきた。

「最後にもう一つ教えてあげよう。執着から解放するのも愛である。愛とは執着しないこと、と言い換えてもよい。うん決まった。また一つ悟ったな、オレ」

「・・・先輩ってほんとにもう、しょうがない人ですね」

「というわけでよろしく」

ため息ひとつ。

「こんなに頼まれちゃったら、しょうがないから、わたしも前に進んであげます」

「うん。草葉の陰から応援してるよ」

「先輩。大好きでした」

先輩は、にっと、わたしの大好きな微笑み方でちよつと笑った。それからふつと空気に溶けこむように、見えなくなった。とてもあつけなく。

ああ今度こそ、永遠にさよならだ。もうあの下らない話を聞くこともできない、唯一もらった金魚もいない。とうとう手も握つてくれなかった。

もつと先輩にやさしくすればよかった。もつと早く、先輩に好きって言えばよかった。

でもしようがない。約束させられちゃったから、これからはあんまり、うじうじあなたのこと考えるの、やめてあげるよ。

顔に涙と鼻水をくつつけたまま、わたしはまたその場に倒れるように眠ってしまった。

夢の中で、誰かのへたつぴな子守唄が聞こえた。

翌日、目を覚ますと、もう昼の十一時だった。ひどく頭痛がする。今日はバイトはないから、思い切り自堕落に過ごそう。

そう思つて窓を開けると、雨が上がつてきれいな虹が出てた。よかった。そんなに雨が嫌いじゃなくなるかもしれない。

部屋の中はひどい状態だった。テーブルはズレて、コーヒーカーブは落ちてラグにしみがついてるし、グラスも割れてる。きれいにしてから消えればよかったのに気の利かない、まあでもすり抜けちゃうから無理なのか、ほんとに最後まで世話の焼ける人だったなど、ぐちゃぐちゃな頭で思いながら、掃除をはじめた。

そのとき、わたしがグラスをぶつけたあたりに、汚い文字で何か書いてあるのに気が付いた。

「愛して失ったほうがいい、まったく愛さなかったよりも　アル
フレッド・テニソン」

先輩。やっぱりあなたはどうしようもない人ですね。未練たつぷりじゃないですか。しょうがないから、小野寺君か、またはそれ以上の人を、掴まえてあげます。文学部もがんばるし、ご飯もモリモリ食べます。でも残念ながら、あなたのことは忘れません、少なくともしばらくは。

忘れなくたって進める程度には、しっかりしてるんですよ。わたしは誰かと違いますから。

窓の外を見ると、虹は空気に溶けて、なくなっていた。
そのかわり、すつきり青い空が目につつた。

（８）涙と鼻水と虹と（後書き）

読んでいただいております。

ここまでで先輩中心のお話はいったん終了ですが、このあとは、オノデラ君との話で、

（同時期のほんとに短い小話を挟み、）

一年後ぐらいの二人の話が少しだけ続く予定です。

多少雰囲気が変わるかもしれませんが、

その話まで含めて完結となる予定です。

もうちょっとだけおつきあいいただけると、嬉しいです。

オノデラ君との微妙なある日（小話）

「このあいだのアレ、やつぱりキタジマさん来てたの？」

「え？ なんのこと？ 先輩は・・・」

「なにつてだから、ポルターガイストの話」

「ははは、やだなあ、そんな非科学的なこと小野寺君が言うなんてところで小野寺君は、天国は天使に純白の薔薇派？ それとも極楽浄土で金銀珠玉派？ それとも」

小野寺君がわたしの手首をつかんだ。

「こういうふうにすると、おとなしくなっちゃうんだよね。あと、嘘つくとき、微妙にヘンな顔になるから、気をつけた方がいいよ」

「・・・小野寺君で、こんな性格だっけ」

「性格わかるほど、こつち見てなかったんじゃない？ ところで、こないだの続きをしたら、キタジマさんまた出てくるかな」

「やだ、もう出てこないよ」

「やだと思っても耐えなきゃダメだよ、恋愛は忍耐であると萩原朔太郎も言っている」

「・・・そっいうの、ものすごく誰かに似てるからやめてくれない？」

ここから先、格言は出てきませんのでご安心ください。と小野寺君が言ってます。

(9) あれから一年

もうすぐわたしの誕生日がやってくる。わたしの誕生日ということとは、・・・まあ、そういうことだ。

去年の今ぐらいまでの約三年間、わたしは意気地無しで弱虫で卑怯なある人が好きだった。ことばにするのも照れくさいが、いわゆる初恋というやつだった。初恋というやつ特有の不器用さは全開であったが、同じく特有の甘酸っぱさの方面は皆無だった。

それというのも、自分の感情に気付いたのと失恋したと思ったのがほぼ同時、それに自分の後ろ向きの性格やらその人のぬらりひよんの性格やらがひっ絡まって、胸の中はつつけばマイナスの感情が飛び出してくる、という状態だったから。

結論としては、意気地無しで弱虫で卑怯だったのはわたしでした、というパターンに収まって、その人、例の先輩は、ヘンな人ではあったけど、とても優しい人だった。

先輩は、今でもこんな風にときどき顔を出す。もちろん物理的（あの現象を物理的といったら科学者に怒られそうだが）な意味ではなく、ふと思いつく、ということ、わたしは無理にそれをやめようとは思っていない。逆に思い出さなくなったとしても、それはそれでいいと思っている。

こういう心境になれたのは、最後に押しかけてくれた先輩本人と、現在みどりのぶどう像の前でブスっとした顔をしてしゃがみこんでいるこの人のおかげだ。

そういうわけで、現在わたしは、明るく楽しい恋愛を模索中である。

「たいへん申し訳ありませんでした」

模索中であるのに、なぜわたしが謝っているかという、バイトのシフトを勘違いしていて、待ち合わせに一時時間も遅刻したからである。

「うっん。どうやって償ってくれるのか考えてたら、楽しくなってきたよ」

「つぐなう、じゃなくて、正しい日本語は、うめあわせる、とかだよね。今日の食事代はもちろんわたしが出しましよう」

それには答えず、しゃがんだままで片手を突き出す。しょうがないから、両手で引つ張って立たせた。

小野寺君は立ちあがるとわたしの顔を覗きこみ、「ふふん」みたいに頷いて言う。

「手を引つ張るとき、一瞬ためらった顔がかわいかったから許す」
「はあ、そうですか」

「かわいい」に類する褒め言葉を、誰かれ構わず湯水のように垂れ流す人、それが小野寺君だ。

もしも、例の先輩が「かわいい」なんて言ったりしたら、それは宝くじの一等賞、までいかなかったも、前後賞くらいの価値はあったはずだが、この人のは十枚買えば必ず一枚含まれている当たり、程度にしか価値はない。

しかしこの人は現在、わたしにとって、この世で一番親しい異性であり、わたしの好きな人でもある。

そう、好きなのだ。他の人を好きになるなんて、考えられなかった時期もあったけど。

あの頃は、好きな相手がほかの人のことを見ていると思うと、まっ黒な気持ちになった。

今は相手が同じようにわたしを好きではなくても、まあそれはそれ、と思う。わたしも成長したものである。

これを美奈に言ったら、そーいうのは好きって言わないんじゃないな

いの、と言われてしまったが、いや違う。断言する。わたしはこの人が好きだ。

そこから先のことばかり考えていると、わたしは人並み以上にまっ黒になれる素質がある、ということをしつかり学ばせてもらった結果、こうなった。まあ、我ながら、こういう極端なところは変わってないと認めよう。

「ボケつとした顔して何かんがえてるの？」

横を歩く小野寺君が聞く。ただ隣りを歩いているだけのことが、ひそかに嬉しい。

「わたしこの人好きだな、と思ってた」

見上げて答えると、ぷいっと顔をそらされた。

梅雨のおわりが近づいた、中途半端なくもり空。その空を見上げるように、そらされたままの小野寺君の顔が戻って来ない。さすがにちよつと不安になってきたところに、後頭部をぺしっとたたかれた。

さてこの小野寺君、出会った当初の印象とは、若干異なる人だった。それが嫌かと問われれば、嫌ではなくて、むしろ逆。好きだから嫌じゃないのか、嫌じゃないから好きなのか、そのところは謎である。

まあ、基本的には人当たりがよく、誰にでも優しい人だ。でもその反動なのか、慣れてくると、それ以外の印象も強くなってくる。

出会った当初は、例の先輩と比較して、欠点のない人みたいに思ってた。たとえば、今日みたいに、待ち合わせの相手が一時間も遅れたような場合。微笑んで「ゼンゼンマツテナカタヨ」的な対応をするか、現実的なところで、文句は言わずにその旨メールしてスマートに帰る、そういう態度をとる人かと思っていた。

実際のところは、メールを入れたりして帰るのもめんどくさい、だからそのまま待っている、という人だった。

多分、人から嫌われたりするのめんどくさいのだろう。

欠点がない人だなんて、勝手に決めつけてた頃は何とも思ってたのに、いつの間にこんな気持ちになったのか、とまた隣りの人の顔を見上げた。

「また心があの世に飛んでた？」

「そうでもない。考えてたのは、ほとんどこの世のことだよ」

「ふうん。それにしては随分、あっさりついてきたんだね」

うだうだ考えながら歩いているうちに着いたのは、どうやら小野寺君の部屋の前らしい。

「一時間も待たされた僕がわざわざコーヒー入れてあげるから。いやもう、ほんと疲れた」

そういえばこの人も、嫌味を言ったりするときなんかは、非常に口達者だ。わたしはそういう人に魅かれるたちなのか。

「それはありがとう。でも食事どうするの？」

そもそも今日は、ちよつと散歩でもしてから早目の夕食を一緒にとろうと約束していたのだ。

「・・・」

こういうところに住んでいるんだと思いながら、ドアの前でキョロキョロしていたら、小野寺君があきれた顔で紙袋を掲げて見せた。そうだった。新しくできたサンドイッチ専門店で、食べるものを買ったんだった。グラムブレッドにこれでもかというくらい、野菜だのチキンだのを挟み込んだ、かなり大口を開けてかぶりついて、きれいに食べるのは難しい類の。

そうか、これを小野寺君の前で食べるのか。ボロボロこぼしながら。ちよつと恥ずかしいと思ったわたしは恋するオトメ？・・・うはははは、自分で考えという気持ち悪いわ。

ニヤニヤしていたところで、小野寺君と目があつた。
「ほんと、あの人に同情せずにはられないよ」

あの人というのは、例の先輩のことだろう。わたしは自分で思い出すのは平気だが、人からこんな形で言われると、ちよつとやだ、というか、ちくつとする感じがしてしまう。

でもこういう感情は、自分でも勝手だと分かつてはいる。

(10) 一緒に見上げる曇り空 (完)

ちなみに、今の小野寺君とわたしの関係は、客観的に見れば、仲の良い友達といったところだろう。

一年ほど前に、一秒に満たない短い時間、ただの友達ならしないうたぐいの接触をした覚えはあるが、それ以来、そういうことは一度もなかった。それに、どちらかの部屋に行ったりするようなこともなかった。

例の先輩は、こちらがそれ以上の接触でもどんと来い、と思っていても、それが簡単にはできないというか、そういう発想がない人だったのだろう。それは相手がわたしではなくても同じはずだ、と信じたい。

でもこの人の場合は、できないとかではなく、しなただけだ。これは相手がわたしでなければ違うのだろう、とも思う。この人には「女の子の友達」がたくさんいるみたいだから。

そしてわたしの方も、前とは違って、友達のうちの一人みたいな関係で満足してしまっている。

今日みたいにときどき待ち合わせて、食事をしたり、映画を見たりするだけのことが、とても楽しい。

ただ、もちろん、今まで以上に親しくなるのも、やぶさかではない。

やぶさかではない、のだが、何事にも心の準備が必要だ。

それができていれば、頬を桜色に染めてうつむいた、のようなこととしてみたかったが、残念ながら、小野寺君の部屋に赤鬼がいま、のような顔をさらすことになった。

鍵をあけてもらって先に部屋に入ったわたしは、中をぐるりと見渡した。中の様子は、予想通りというか、すっきりとあまり物も多なくて、小野寺君らしい感じだった。

わたしの部屋よりもちろん新しいけど、家賃はいくらぐらいなんだろう、などと下世話なことを思ってしまう。

後ろから肩をとん、とたたかれて、顔だけ振り返ったら、すぐ後ろに小野寺君が立っていた。

うわ、背後霊、とか言おうかと思ったけど、やめといてよかった。彼の腕が肩を抱きこむように動くと、気がついたら自分の体が半回転していて、わたしは小野寺君の正面にいた。

わたしの肩にかけられた片方の手のひらが、ゆっくり背中の方におりていって、もう片方の手は首の後ろのあたりを少し撫でてから、支えるようにそこに置かれた。

彼の目が、わたしを見ている。

一気に顔に血がのぼってしまった。

目を閉じたいと思ったけど、顔が固まってしまったみたいに、それができない。自分の指の先を動かすこともできない。何か言つことさえできそうにない。

そうこうするうちに、体までふるえだす。

たったこれだけのことで情けなさ過ぎて、もうほとんど泣きたい。

ほんとにはやっぱり友達の中の一人じゃ嫌だ

もしこれで嫌われてしまったら、これからわたしはどうしよう
これからわたしは、また・・・

「黙ってて」

つぶやくみたいに言われて、背中にあった方の手が、なだめるように耳のあたりを包んだ。

その反対側の頬にやさしい感触が降ってくると、それでようやく、わたしは目を閉じることができた。

とっちらかっていた頭の中も、少しずつ静かになっていく。

何か言うことさえできそうにない、とか思っただけなのに、何かを口走っていたらしいわたしの唇の上に、頬の方からさっきの感触がゆるゆると移動してきて、留まった。

首の後ろに置かれていた手のひらに少し力が入って、わたしは自分、唇を差し出すような姿勢になっている。

体中の神経が、手が置かれていた耳のあたりと、首の後ろと、唇に集まってしまったような感覚の中で、固まっていた両腕を、ようやく小野寺君の背中にまわした。

その背中が少しカーブしているのがわかって、かがみこんでいるんだな、などと思った。

一度やわらかくわたしを抱きしめてから体を離れた小野寺君は、頬のあたりにちよつと触れると、あっさり部屋の奥に行ってしまった。

急に体のまわりの温度が下がって、こころもとないような、さびしいような感じがする。

それからようやく、まわりの物音が耳に入るようになってきた。

当然のことながら。長い間口だけ達者な先輩を思っていたわたしとしては、さっきのようなことも初めてだった。

だから多少ブザマでもしょうがないのだ、かまわないのだ、誰にも文句はいわせないのだ。

と、というようなことを考えながら、その場でつつ立っていたら、「ぼけつと立ってないでこっちに来たら」

と、もっともな言葉がかけられたので、しおしおと足を前に進めた。

コーヒーメーカーがポコポコいつている。いい匂いがした。

小野寺君がソファを指さしたので、すなおに座った。長い指が静かに動いて、コーヒーがマグカップに注ぎ分けられるのを、手伝いもしないで見ていた。

「はいどうぞ」

「ありがとうございます」

そういえば、これと一緒にサンドイッチを食べるはずだったので。と、思い当って、せめてそれくらいはわたしが準備しようと、腰をあげた。

隣りに座った小野寺君が玄関ドアの方を指さして、そこに紙袋が転がっているのが見える。

「落ちてるね」

「うん」

「ええと。でも、食べられるよね」

「うん」

「じゃ、とってくるね」

「うん」

うん、と言ったその人がわたしの手首をつかんでいるので、取りに行くこともできず、もう一度腰をおろした。

「あのさ。最初的时候は、ほんとにしれっとしてたよね」

前をむいたまま小野寺君がいう。

「最初的时候って？」

「一年も前。コーヒーカップが飛んだり部屋が揺れたりする直前のこと」

「うっ」

例の一秒未満。

「すいませんでした」

「謝るってことは、悪いことしたって思ってるんだ」

「・・・はい」

「あの頃はさ、かなり危ない感じだったけど、自分でわかってた？
棺桶に足を突っ込ませないように相当がんばってた僕の純情、そろそろ報われるべきだよな」

「だからいろいろ誘い出してくれてたんだって思っで、とても感謝してます」

今だつて、わたしが再びどめ色の日々に戻らず、普通に生活できているのは、この人の優しさのおかげだ。

「もてあそばれて利用されたのに、今まで君だけに尽くしてきた僕の気持ちをわかつているのかな」

君だけに尽くしてきた、という部分を中心に断固として異論をとねえたい。が、普段この人がどういう生活をしているのか、考えないようにしていたので実際のところはよく知らない。

「小野寺君はもてあそばれて利用されるタイプじゃないでしょ」

「そうなる直前だったよ。もしさつきも最初のと看みみたいだったら、もうあきらめて捨てられようかと思った」

うそ。ギリギリセーフ。よかった。ありがとう赤鬼くん。

「すいませんでした」

「何考えてるんだかまったくわかんなかった。あんなことのあとで、聞くわけにもいかないし」

それはわたしもそうだった。そう言うかわりに、肩のところに顔を寄せた。

「今もよくわかんないけど、まあいいや。もう一回、嫌いにならないいでつて言ったら許す」

「えっ。もう一回つて？」

嫌な予感がしてあわてて顔を離した。

「はあ。ついさつき、そう言つてたでしょ。真つ赤な顔して」

うそ。悶絶。鼻血。そんなベタでこっばずかしいことを口走つていたのか。

「その気持ちに偽りはありません、ってことで見逃して欲しい」
肩がソファに押さえつけられて、今度は喉に小さな重みがのっか
って、ひえーっと思いつながら、結局わたしはもう一回、そのこっぱ
ずかしいことばを口にした。

そういうわけで、いろいろなことを模索しつつ、なんとかわたし
は、元気な日々を送らせていただいております。

おわり

(10) 一緒に見上げる曇り空 (完) (後書き)

どうもありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5988x/>

意気地無し先輩との珍妙な日々

2011年11月11日03時18分発行